

白金之繪圖

泉鏡花

青空文庫

片側は空も曇つて、今にも一村雨来そうに見える、日中も薄暗い森続きに、畝り畝りはるばると黒い柵を繞らした火薬庫の裏通、寂しい処をとぼとぼと一人通る。

「はあ、これなればこそ可けれ、聞くも可恐しげな煙硝庫が、カラカラとして燥いで、日が当つては大事じゃ。」

と世に疎そうな独言。

大分日焼けのした顔色で、帽子を被らず、手拭を畳んで頭に載せ、半開きの白扇を額に翳した……一方雑樹交りに干潟のような広々とした畑がある。瓜は作らぬが近まわりに番小屋も見えず、稲が無ければ山田守る僧都もおわさぬ。

雲から投出したような遣放しの空地に、西へ廻つた日の赤々と射す中に、大根の葉のかなたこなたに青々と伸びたを覗めて、

「さて世はめでたい、豊年の秋じゃ、つまみ菜もこれ太根になつたよ。」

と、一つ腰を伸して、杖がわりの縷子張の蝙蝠傘の柄に、何の禁厭やら烏瓜

の真赤な実、藍、萌黄とも五つばかり、蔓ながらぶらりと提げて、コツンと支いて、面長で、人柄な、頤の細いのが、鼻の下をなお伸して、もう一息、兀の頂辺へ扇子を翳して、「いや、見失つてはならぬぞ、あの、緑青色した鳶が目当じや。」

で、白足袋に穿込んだ日和下駄、コトコトと歩行き出す。

年齢六十に余る、鼠と黒の万筋の袷に黒の三ツ紋の羽織、折目はきちんと正しいが、色のやや褪せたを着、焦茶の織ものの帯を胴ぶくれに、懐大きく、腰下りに締めた、顔は瘡せた、が、目じしの落ちない、鼻筋の通つたお爺さん。

眼鏡はありませんか。緑青色の鳶だと言う、それは聖心女子院とか称うる女学校の屋根に立つた避雷針の矢の根である。

もつとも鳥居数は潜つても、世智に長けてはいそうにない。

ここに廻つて来る途中、三光坂を上つた処で、こう云つて路を尋ねた……

「率爾ながら、ちとものを、ちとものを。」

問われたのは、ふらんねるの茶色なのに、白縮緬の兵児帯を締めた髭の有る人だから、事が手軽に行かない。——但し大きな海軍帽を仰向けに被せた二歳ぐらいの男の児を載せた乳母車を曳いて、その坂路を横押に押してニタニタと笑いながら歩行していたから、

親子の情愛は御存じであろうけれども、他人に路を訊かれて喜んで教えるような江戸兎ではない。

黙然で、眉と髭と、面中の威厳を緊張せしめる。

老人もう一倍腰を屈めて、

「えい、この辺に聖人と申す学校がござりまする筈で。」

「知らん。」と、苦い顔で極附けるように云った。

「はッ、これはこれは御無礼至極な儀を、実に御歩を留めました。」

がたがたと下りかかる大八車を、ひよいと避けて、挨拶に外した手拭も被らず、その

まま、とぼんと行く。頭の法体に対して、余り冷淡だったのが気の毒になったのか。

「ああ聖心女学校ではないのかい、それなら有ツじやね。」

「や、女子の学校？」

「そうですッ。そして聖人ではない、聖心、心ですが。」

「いかさま、そもござりましょう。実はせんだつて通掛りに見ました。聖、何とや

らある故に、聖人と覚えまして。いや、老人粗忽千万。」

と照れたようにその頭をびたり……といった爺様なのである。

二

その女学校の門を通過ぎた処に、以前は草鞋でも振ら下げて売つたろう。葭簣張ながら二坪ばかり囲を取つた茶店が一張。片側に立樹の茂つた空地の森を風情にして、如法の婆さんが煮ばなを商う。これは無くてはなるまい。あの、火薬庫を前途にして目黒へ通う赤い道は、かかる秋の日も見ると暑く、並木の松が欲しそうであるから。老人は通りがかりにこれを見ると、きちんと畳んだ手拭で額の汗を拭きながら、端の方の床几に掛けた。

「御免なさいよ。」

「はいはい、結構なお日和でございます。」

「されば……じやが、歩行くにはちと陽氣過ぎますの。」

と今時、珍しいまで躰の可い扇子を抜く。

「いえ、御隠居様、こうして日蔭に居りまして汗が出来ますでございますよ。何ぞ、シトロンかサイダアでもめしあがりますか。」と商売は馴れたもの。

「いやいや、老人としよりの冷水とやら申す、馴れた口です。お茶を下され。」

「はいはい。」

ちと横幅の広い、元氣らしい婆さん。とぼけた手拭、片かた襷だすきで、古ぼけた塗盆へ、ぐいと一つ形容の拭巾ふきんをくれつつ、

「おや、坊ちゃん、お嬢様。」と言う。

十一二の編あみさげで、袖そでの長いのが、後あとについて、七八ツのが森の下へ、兎うさぎと色鳥いろどりひらりと入った。葭簣よし越こしに、老人はこれを透かして、

「ああ、その森の中は通抜けが出来ますかの。」

「これは、余所よそのお邸様やしきの持地もちじでございまして、はい、いいえ、小児衆こどもしゆは木の実を拾いに入りますのでございませよ。」

「出口に迷いはしませんかの、見受けた処、なかなかどうも、奥が深い。」

「もう口許くちもとだけでございます。で、ございませうから、榎えのきの実に団栗どんぐりぐらい拾いますので、ずつと中へ入りますれば、栗も椎しもございませうが、よくいたしたもので、そこまでは、可こ恐わがつて、お幼いちいさのは、おいたが出来ないのでございます。」

「ははあいかにもの。」

と、飲んだ茶と一緒に、したたか感心して、

「これぞ、自然なる要害、樹の根の乱杭、枝葉の逆茂木とある……広大な空地じやな。」

「隠居さん、一つお買いなすつちやどうです。」

と唐突に云った。土方体の半纏着が一人、床几は奥にも空いたのに、婆さんの居る腰掛を小楯に踞んで、梨の皮を剥いていたのが、ペロりと、白い横銜えに声を掛ける。

真顔に、熟と肩を細く、膝頭に手を置いて、

「滅相もない事を。老人若い時に覚えがあります。今とてもじや、足腰が丈夫ならば、飛脚など致いて通つてみたい。ああ、それもならず……」

と思入つたらしく歎息したので、成程、服装とても秋日和の遊びと見えぬ。この老人の用ありそうな身過ぎのため、と見て取ると、半纏着は気を打って、悄気た顔をして、剥いて落した梨の皮をくるくると指に巻いて、つまらなく笑いながら、

「ははは、野原や、山路のような事を言つてなさらあ、ははは。」

「いやいや、まるで方角の知れぬ奥山へでも入つたようじや。昼日中提灯でも松明でも点けたらばと思う気がします。」

がつくりと俯向いて、

「頭ばかりは光れども……」

つるりと撫でた手、頸の窪。

「足許は暗じやが、のう。」と悄れた肩して膝ばかり、きちんと正しい扇を笏。

と、思わず釣込まれたようになって、二人とも何かそこへ落ちたように、きよろきよろと土間をす。葭簀の屋根に二葉三葉。森の影は床几に迫って、雲の白い蒼空から、木の実が降って来たようであった。

三

半纏着は、急に日が蔭ったような足許から、目を上げて、兀げた老人の頭と、手に持った梨の實の白いのを見較べる。

婆さんが口を出して、

「御隠居様は御遠方でいらつしやるのでございますか。」

「下谷じゃ。」

「そいつあ遠いや、電車でも御大抵じやねえ。へい、そしてどちらへお越しになるんで。」
「いささかこの辺あたりへ用事があつての。当年たつた一度、極暑ごくしよの砌みぎり参つたばかり、一向に
覚束おぼつかない。その節通りがかりに見ました、大な学校おおきを当あてにいたした処、唯ただいま今立寄つて
見れば門が違うた。」

腕のほを伸して、来た方を指すと共に、齊ひとしく扇子を膝に支ついて身体からだごと向直る……それにさ
え一息して、

「それは表門でござつた……坂も広い。私が覚えたのは、もそつと道が狭うて、急な上のぼり
坂ざかの中途の処、煉瓦れんが塀べいが火のように赤う見えた。片側は一面な野の草で、蒸れいぎの可おそろ
恐おそい処でありましたよ。」

「それは裏門でございますよ。道理こそ、この森を抜けれまいか、とお尋ねなされた、
お目当は違ひませぬ。森の中から背面うしろの大おお島ぼたけが抜けられますと道は近うございますけ
れども、空地でもそれが出来ませんので、これから、ずつと煙硝庫えんしやうぐらの黒塀くろべいについて、
上のぼつたり、下くだつたり、大廻りをなさらなければなりません。何でございますか、女学校に
御用事はございませんか。それだと表門でも用は足りませうでござりますよ。」と婆おばさ
んは一度掛けた腰掛をまた立つて、森を覗のぞいたり、通とを視みたり。

「いやいや、そこを目当に、別に尋ねます処があります。」

「ちやんとわかっているんですかい、おいでなさる先方さきつてのは。こう寂しくつて疎在まぼらでね、家の分うちりにくい処ですぜ。」と、煙草たばこ盆は有るものを、口許くちごで燐寸マッチを※、と目を細うして仰向あおむいて、半分消しておいた煙草をつける。

「余り確かでもないの。また家は分るにしてもじゃ。」

と扇子を倒すのと、片膝力なく叩くのと、打傾くのがほとんど一緒に、

「仔細しさいなく当方の願が届くかどうかの、さて、」

と沈む……近頃見附けた縁類へ、無心合力にでも行きゆそうに聞えて、

「何せい、煙硝庫と聞いたばかりでも、清水が湧わくようではない。ちと更あらたまつては出たれども、また一つ山を越すのじゃ、御免ごめんを被こうむる。一度羽織を脱いで参ろう。ああ、いやお婆さん、それには及ばぬ。」

紋着もんつきの羽織を脱いだのを、本畳みに、スーツスーツと襟を伸して、ひらりと焦茶ひもの紐ひもを捌さばいて、纏もつれたように手を控え、

「扮装いでたちばかり凜々りりしいが、足許はやつぱり暗夜やみじゃの。」と裾すそも暗いように、また陰気。半纏着は腕組して、

「まったく、足許が悪いんですかい、負おぶつて行く事もならねえしと……隠居さん、提ちようち灯んでも上げてえようだ。」

「夜だとほんとうにお貸し申すんだがねえ。」

「どうですえ、その森中の暗い枝に、烏瓜うりッてやつが点ともつていますあ。真紅まつかなのは提灯ていとうみたいだ。ねえ、持つておいでなさらねえか、何かの禁厭おましなになろうも知れませんか。」

「はあ、烏瓜の提灯か。」

目を瞑つむつて、

「それも一段の趣じやが、まだ持つて出たという験ためしを聞かぬ。」と羽織を脱いでなお瘦やせた二の腕を扇子で擦さする。

四

「凍傷しもやけの薬を売つてお歩ある行きなさりはしまいし、人。」

と婆さんは、老いたる客の真面目まじめなのを気の毒あはらしく、半纏着の背中を立身たちみでおさせて、

「可いい加減かへんな、前例ためしにも禁厭ましなにも、烏瓜うりの提灯ちようちんだなんぞと云つて、狐こが点とほすようじ

やないかね。」

「狐が点す……何。」

と顔を蔽うた皺を払って、雲の晴れた目を睜る、と水を切った光が添った。

「何、狐が点すか。面白い。」

扇子を颯と胸に開くと、懐中を広く身を正して、

「どれ、どこに……おお、あの葉がくれに点れて紅いわ。お職人、いい事を云って下さった。どれ一つぶら下げて参るとします。」

「ああ、隠居さん、気に入ったら私が引ちぎって持って来らあ。……串戯にや言ったからって、お年寄のために働くんだ。先祖代々、これにばかりは叱言を言うめえ、どつ

こい。」と立つ。

老人は肩を揉んで、頭を下げ、

「これは何ともお手を頂く。」

「何の、隠居さん、なあ、おつかあ、今日は父親の命日よ。」

と、葭簀を出る、と入違いに境界の柵の弛んだ鋼線を跨ぐ時、葭を勢よく、ポンと投げて、裏つきの破足袋、ずしツと草を踏んだ。

紅いその実は高かった。

音が、かさかさとして此方に響いて、樹を抱いた半纏は、梨子を食べた獣のごとく、向顔で葉を分ける。

「氣を付きようぞ。少い人、落ちまい……」と伸上る。

「大丈夫でございませよ。電信柱の突尖へ腰を掛ける人でございませからね。」

「むむ、俠勇じやな……杖とも柱とも思うぞ、老人、その狐の提灯で道を照す……」

「可厭ではございませんかね、この真昼間。」

「そこが縁起じや、禁厭とも言うのじやよ、金烏玉兎と聞くは——この赫々とした

日輪の中には三脚の鴉が棲むと言うげな、日中の道を照す、老人が、暗い心の補助に、

烏瓜の灯は天の与えと心得る。難有い。」と掌を額に翳す。

婆さんは希有な顔して、

「でも、狐火か何ぞのようで、薄氣味が悪いようでございませね。」

「成程、……狐火、……それは耳より。ふん……かほどの森じや、狐も居ろうかの。」

「ええ、で、ございませのでね、……居りますよ。」

「見たか。」

「前ぜんには、それは見たこともございますとも。」

老人これを聞くと腰を入れて、

「ああ、たのもしい。」

「ええ……」

と退しげった、今のその……たのもしい老人の声の力に圧おされたのである。

「さて、鳴くか。」

「へい？……」

「やはりその、」

と張はり肱ひじになつた呼吸いきを胸むねに、下腹したはらを、ずん、と据えると、

「カーン！ というて？」

どさりと樹から下りた音。瓜がぶらり、赤く宙に動いて、カラカラと森に響く。

婆さんの顔を見よ。

半纏着が飛んで帰つて、同じくきよとつく目を合せた。

「驚いた……鳥が一いっ斉ときに飛びやあがつた。何だい、今の、あの声は。……鳥瓜もぎを撈もつただけで下りりや可いいのに、何だかこう、樹の枝きに、茸きのこがあつたもんだから。」

五

「これ、これ、いやさ、これ。」

「はあ、お呼びなされたは私の事で。」

と、羽織の紐を、両手で結びながら答えたのは先刻の老人。一方青煉瓦の、それは女学校。片側波を打った垂鉛塀に、ボヘミヤ人の数珠のごとく、烏瓜を引掛けた、件の繻子張を凭せながら、畳んで懐中に入れていた、その羽織を引出して、今着直した処なのである。

また妙な処で御装束。

雷神山の急昇りな坂を上つて、一畝り、町裏の路地の隅、およそ礫川の工廠ぐらゐは空地を取つて、周囲はまだも広かろう。町も世界も離れたような、一廓の蒼空に、老人がいわゆる緑青色の鳶の舞う聖心女学院、西曆を算して紀元幾千年めかに相当する時、その一部分が武蔵野の丘に開いた新開の町の一部分に接触するのは、ただここばかりかも知れぬ。外廓のその煉瓦と、角邸の垂鉛塀とが向合つて、道の幅がぎし

りと狭い。

さて、その青鳶あおとびも樹とまに留ていつた体に、四階造しかいづくりの窓硝子まどがらすの上から順々、日射ひざしに晃々きらきらと数えられて、仰ぐと避雷針が真上に見える。

この突当りの片隅が、学校の通用門で、それから、ものの半町程、両側の家邸。いずれも雑樹林や、畑はたを抱く。この荒地あれちの、まばら垣と向合ったのが、火薬庫の長々とした塀になる。——人通りも何にも無い。地図の上へ鉛筆で楽書らくがきしたも同然な道である。

そこを——三光坂上の葭簣張よしすばりを出た——この老人はうら枯がれを摘かじんだ籠かごをただ一人で手に提げつつ、曠野あらのの路たじを辿るがごとく、烏瓜のぼつちりと赤いのを、蝙蝠傘こうもりがさに搦からめて支ついて、青い鳶を目的めあてに、扇で日を避け、日和下駄を踏んで、大廻りに、まずその寂しい町へ入つて来たのであつた。

いや、火薬庫の暗い森を背中から離すと、邸構えの寂しい町も、桜の落葉に日が燃えて、梅の枝にほんのりと薄綿の霧が薫る……百日紅さるすべりの枯れながら、二つ三つ咲残つたのも、何となく思出おもいでの暑さを見せて、世はまださして秋の末でもなさそうに心強い。

そこをあちこち、覗のぞいたり、視みたり、立留たちどまつたり、考えたり、庭前にわさき、垣根、格子の中。

「はてな。」

屋の棟を仰いだり、後退りをまたしてみたり。

「確かに……」

歩行出して、

「いや、待てよ……」

と首を窘めて、こそこそと立退いたのは、日当りの可い出窓の前で。

「違うかの。」と独言。変に、蹙音を忍ぶ形で、そのまま通過ぎると、女学校のその通用門を正面に見た。

「このあたり……ああ緑青色の鳶じや、待て、待て、念のためよ。」

あの、輝くのは目ではないか、もし、それだと、一伸しに攫って持って行かれよう。金魚の木伊乃に似たるもの、狐の提灯、烏瓜を、更めて、蝙蝠傘の柄ぐるみ、ちようと腕長に前へ突出し、

「迷うまいぞ、迷うな。」

と云い云い……（これ、これ、いやさ、これ。……）ここに言咎められている処は、いましがた一度通ったのである。

そこを通つて、両方の塀の間を、鈍い稲妻形に畝つて、狭い四角から坂の上へ、によい、と皺面を出した……

坂下の下界の住人は驚いたろう。山の爺が雲から覗く。眼界濶然として目黒に豁け、大崎に伸び、伊皿子かけて一渡り麻布を望む。鳥は鷗が浮いたよう、遠近の森は晴れた島、目近き雷神の一本の大梅の、旗のごとく、剣のごとく聳えたのは、巨船天を摩す柱に似て、屋根の浪の風なきに、泡の沫か、白い小菊が、ちらちらと日に輝く。白金の草は深けれども、君が住居と思えばよしや、玉の台は富士である。

六

「相違ない、これじゃ。」

あの怪しげな烏瓜を、坂の上の藪から提灯、逆上せるほどな日向に突出す、痩せた頬の片鱗は気味が悪い。

そこで、坂を下りるのかと思うと、違った。……老人は、すぐに身体ごと、ぐるりと下駄を返して、元の塀についてまた戻る……さては先日、極暑の折を上つたというこの坂で、

心当りを確めたものであろう。とすると、狙をつけつつ、こそこそと退いてござったあの町中の出窓などが、老人の目的ではないか。

裏に、眉のあとの美しい、色白なのが居ようも知れぬ。

それ、うそうそとまた参った……一度屈腰になつて、静と火薬庫の方へ通抜けて、隣邸の冠木門を覗く梅ヶ枝の影に縫つて留ると、件の出窓に、鼻の下を伸して立ったが、眉をくしゃくしゃと目を瞑つて、首を振つて、とぼとぼと引返して、さあらぬ垣越。百日紅の燃残りを、真向に仰いで、日影を吸うと、出損なつた嚏をウツと吸つて、扇子の隙なく袖を圧える。

そのまま、立直つて、徐々と、も一度戻つて、五段ばかり石を築いた小高い格子戸の前を行過ぎた。が溝はなしに柵を一小間、ここに南天の実が赤く、根にさふらの花が芬と薫るのと並んで、その出窓があつて、窓硝子の上へ真白に塗つた鉄の格子、まだ色づかない、蔦の葉が棧に縫つて廂に這う。

思わず、そこへ、日向にのぼせた赤い顔の皺面で、鼻筋の通つたのを、まともに、伸かかつて、ハタと着ける、と、颯と映るは真紅の肱附。牡丹たちまち驚いて翻れば、花弁から、はつと分れて、向うへ飛んだは蝴蝶のような白い顔、襟の浅葱の洩れたの

も、空が映つて美しい。

老人転倒せまい事か。——やあ、緑青色の髯間に恥じよ、染殿の御后を垣間見た、天狗が通力を失つて、羽の折れた鴛となつて都大路にふたふたと羽搏つたごとく……慌しい逃げ方して、通用門から、どたりと廻る。とやつとそこで、吻と息。

ちようどその時、通用門にひつたりと附着いて、後背むきに立つた男が二人居た。一人は、小倉の袴、緋の衣服、羽織を着ず。一人は霜降の背広を着たのが、ふり向いて同じように、じろりと此方を見たばかり。道端の事、とあえて意にも留めない様子で、同じように爪さきを刻んでいると、空の鴛が暗号でもしたらしい、一枚びらき馬蹄形の重い扉が、長閑な小春に、ズンと響くと、がらがらぎいと鎖で開いて、二人を、裡へ吸つて、ずーんと閉つた。

保険か何ぞの勧誘員が、紹介人と一所に來たらしい風采なのを、さも恋路でもあるように、老人感に堪えた顔色で、

「ああああ、うまうまに入ったわ——女の学校じやと云うに。いや、この構えは、さながら二の丸の御守殿とあるものを、さりとは羨しい。じゃが、女に逢うには服礼が利益かい。袴に、洋服よ。」

と気が付いた……ものらしい……で、懐中へ顎で見当をつけながら、まずその古めかしい洋傘を向うの亜鉛塀へ押つけようとして、べたりと塗くつた楽書を読む。

「何じや——（八百半の料理はまずいまずい、）はあ、可厭な事を云う、……まるで私に面当じや。」

ふと眉を顰めた、口許が、きりりと緊つて、次なるを、も一つ読む。

「——（小森屋の酒は上等。）ふんふん、ああたのもしい。何じや、（但し半分は水。）……と、はてな……？」

勘助のганもどきは割にうまいぞ——むむむ割にうまいか、これは大沼勘六が事じや。と云つた。

ここに老人が呟いた、大沼勘六、その名を聞け、彼は名取の狂言師、鷺流当代の家元である。

七

「料理が、まずくて、雁もどきがうまい、……と云うか。人も違つて、芸にこそよれ、じ

やが、成程まずいか、ははつ。」

溜息を深うして、

「ややまた、べらぼうとある……はあ、いかさま、この（——）長いのが、べら棒と云うものか。」

あたかも、差置いた洋傘の柄につながった、消炭で描いた棒を視めて、虚気に、きよとんとする処へ、坂の上なる小藪の前へ、きりきりと舞つて出て、老人の姿を見ると、ドンと下りざまに大な破靴ぐるみ自転車をずると曳いて寄つたは、横びしやげて色の青い、猿眼の中小僧。

「やい！」と唐突に怒鳴付けた。

と、ひよろりとする老人の鼻の先へ、泥を掴んだような握拳を、ぬつと出して、

「コン爺い、汝だな、楽書をしやがるのは、八百半の料理がまずいとは何だ、やい。」

「これは早や思いも寄りませぬ。が、何かの、この八百半と云うのは、お身の身内かの。」

「そうよ、まずい八百半の番頭だい、コン爺い。」

と評判の悪垂が、いいざまに、ひよいと齒を剥いて唾を吐くと、ベツとりと袖へ。これが熨斗目ともありそうな、柔らかな人品穩かに、

「私は樂書はせぬけれど、まずいと云うのを決して怒るな、これ、まずければ、私と親類じゃでう。」

「何だ、まずいのが親類だ——ええ、畜生！」と云った。が、老人の事ではない。前生ぜんしよの仇あだが犬になつて、あとをつけて追つて来た、面の長い白斑しろぶちで、やにわに胴を地に摺すつて、尻尾を巻いて吠ほえかかる。

「畜生、叱しつ……畜生。」と拳こぶしを揮ふりまわ廻まわすのが棄鞭すてむちで、把手ハンドルにしがみついて、さすがの悪垂真俯まうつむ向けになつて邸町へ敗走に及ぶのを、斑犬ぶちは波を打つて颯さつと追つた。

老人は、手拭で引摺つて袖を拭きつつ、見送つて、

「……緑樹影沈うおんでは魚樹うおに上る景色あり、月海上に浮うかんでは兔も波を走るか、……いやいや、面白い事はない。」

で、羽織を出して着たのであつた。

頸ほんのくぼ窪くぼに胡摩塩斑ごましおまだらで、赤禿はげに額の抜けた、面つらに、てらてらと沢つやがあつて、でつぱりと肥つた、が、小鼻の皺しわのだらりと深い。引捻ひんねじれた唇の、五十余りの大柄な漢おとこが、酒さ焼けやけの胸を露出あらわに、べろりと兵児帯へこおび。琉球擬まがいの羽織を被きたが、引ひかけぎまに出て来たか、羽織のその襟が折れず、肩をだらしなく両方を懐ふところ手で、ぎくり、と曲角から睨にらんで出

た、（これこれ、いやさ、これ。）が、これなのである。

「何ぞ、老人に用の儀でも。」

と慇懃いんぎんに会釈する。

赭あからがお顔はは、でつぷりとした頬を張って、

「いやさ、用とはこつちから云う事じやろうが、うう御老人。」と重く云う。

「貴方は？」

「いやさ、名を聞くなら其許そこもとからと云う処だが、何も面倒だ。俺は小室こむろと云う、むむ小室と云う、この辺あたりの家主なり、差配なりだ。それがどうしたと言いたい。

ねえ、老人。

いやさ、貴公、貴公先刻さつきから、この町内を北から南へ行ったり来たり、のそのそ歩行あるいたり、窺うかがったり、何ぞ、用かと云うのだ。な、それだに困つてだ。」

もの云う頬がだぶだぶとする。

「されば……」

「いやさ、さればじゃなからう。裏へ入れば、こまごまとした貸家もある、それはある。が、表のこの町内は、俺おれが許とこと、あと二三軒、しかも大々とした邸だ。一遍通り門かど札ふだを

見ても分る。いやさ、猫でも、犬でも分る。

一体、何家どこを捜す？ いやさ捜さずともだが、仮にだ。いやさ、七くどうしち云う事はない、何で俺が門うかごを窺うた。唐突だしぬけに窓のぞを覗いたんだい。」

すつと出て、

「さては……」

「何が（さては。）だい。」

と囁かんでいた小楊枝こようじを、そつぼう向いて、フツと地へ吐く。

八

老人は膝ひざに扇子おあぎ、恭やうやしく腰かを屈かめ、

「これは御大人ごたいじん、お初はつに御意ごいを得えます、……何とも何とも、御無礼ごわびの段だんは改あらためて御詫ごわびを
します。

さて、つかん事を伺うかがいますが、さて、貴方あなたに、お一方ひとかた、お娘御むすめごがおいでなさりはせま
いか。」

と、思込んだ状さまして言った。

「娘……ああ、女のかね。」

唐突だしぬけに他の家の秘蔵よそうちを聞くは、此奴怪こいつけしからずの口吻くちぶり、半ば嘲あざけて、はぐらかす。いよいよ真顔で、

「されば、おあねえ様であらつしやります。」

「姉だか、妹だか、一人居ます。一人娘だよ。いやさ、大事な娘だよ。」

「ははつ、御道理ごもつとも 千萬な儀で。」

「それが、どうしたと云うんですえ。」と、余り老人の慇懃おびさに、膨れた頬を手でおさえた。

「私てまえ、取つて六十七歳、ええ、この年故に、この年なれば御免ごうむを蒙る。が、それにしても

汗が出ます。」

と額ぬくを拭ぬぐつて、咳しわぶきをした……

「何とぞいたして御大人、貴方の思おぼしめし 召めしをもちまして、お娘御、おあねえ様に、でござる、ちよつと、御意を得ますわけには相成りませぬか。」

「ふん、娘にかい。」

「何とも。」

「変だねえ、娘に用があるなら俺に言え、と云うのだが、それは別だ。いやあえて怪しい御仁とも見受けはせんが、まあね、この陽気だから落着くが可うござす。一体、何の用ないんだい。」

「いや、それに就いて罷出ました……無面目に、お家を窺い、御叱を蒙つたで、恐縮いたすにつけても、前後申後れましてござるが、老人は下谷御徒士町に借宅します、萩原与五郎と申して未熟な狂言師でござる。」と名告る。

「ははあ、茶番かね。」と言つた。

しかり、茶番である。が、ここに名告るは惜かりし。与五郎老人は、野雪と号して、鷺流名譽の耆宿なのである。

「おお、父上、こんな処に。」

「お町か、何だ。」

と赭ら顔の家主が云つた。

小春の雲の、あの青鳶も、この人のために方角を替えよ。姿も風采も鶴に似て、清楚と、端正を兼備えた。襟の浅葱と、薄紅梅。瞼もほんのりと日南の面影。

手にした帽子の中山高を、家主の袖に差寄せながら、

「帽子をお被かぶなさいましたッて、お母さんが。……裏へ見廻りにいらしたかと思つたんです。」

と、見迎えて一足退のいて、亜鉛トタン塀べいに背の附くまで、ほとんど固くなつた与五郎は、たちまち得も言われない嬉しげな、まぶしらしい、そして懐しそうな顔をして、

「や、や、や、貴女あなた、貴女じやつた、貴女。」と袖を開き、胸を曳ひいて、縫すがりもつかんず、しかも押おしい戴ただかんず風情である。

疑うたがいと、驚おどきに、浅葱あさあざが細こまく、揺るるがごとく、父の家主の袖を覗みいて、睜みつた瞳は玲れい瓏ろうとして清すしい。

家主は、かたいやつを、誇らしげにスポンと被かつて、腕組をずばりとしながら、

「何かい、……この老人とりよりを、お町、お前知つとるか。」

「はい。」

と云うのが含み声、優しく爽さわやかに聞きえたが、ちと覚おぼ束つかなさそうな響ひびが籠こもつた。

「ああ、しばらく、一旦の御見、路傍みちばたの老耄おいぼです。令おあ嬢ねえさま、お見忘れは道理もつじや。

もし、これ、この夏、八月の下旬、彼これ八ツ下り四時頃と覚えます。この邸町、御宅の処で、迷いに迷いました、路を尋ねて、お優しく御ご懇ねんに、貴女にお導きを頂いた老耄

でござるわよ。」

と、家主の前も忘れたか、気味の悪いほど莞爾々々する。

「の、令嬢。」

「ああ、存じております。」

鶴は裾まで、素足の白さ、水のような青い端緒。

九

「貴女はその時、お隣家か、その先か、門に梅の樹の有る館の前に、彼家の乳母と見えま
した、円鬚に結うた婦の、嬰坊を抱いたと一所に、垣根に立つてござつて……」

と老人は手真似して、

「ちようちちようちあわわ、と云うてな、その児をあやして、お色の白い、手を敲いてお
いでなさる。処へ、空車を曳かせて老人、車夫めに、何と、ぶつぶつ小言を云われな
がら迷うて参つた。」

尋ねる家が、余り知れないで、既に車夫にも見離されました。足を曳いて、雷神坂と承

る、あれなる坂をば喘ぎましてな。

一旦、この辺あたりも捜したなれども、かつて知れず、早や目もくらみ、心も弱よわり果はてました。処へ、煙硝庫の上と思うに、夕立模様の雲は出ます。東西も弁わきまえぬこの荒野あれのとも存ずる空に、また、あの怪鳥けちようの鳶とびの無気味さ。早や、既に立窻たちすくみにもなりましうず処——
—令嬢おあねえさま お姿を見掛けましたわ。

さて、地獄で天女とも思いながら、年は取つても見ず知らぬ御婦人には左右そらのうはものを申し難にくい。なれども、いたいけに児こをあやしてござる。お優やさしさにつけ、ずかずかと立寄りまして、慮外ながら伺うかがいましたじや。

が、御存ごぞんじない。いやこれは然さもそう、深窓ひめごせに姫御前ひめごせとあろうお人の、他所よその番地をずがずがお弁別わきまのないはその筈はずよ。

硫黄いおうが島の僧都そうず一人、継すがともつなる纜切わづられまして、胸も苦しゅうなりましたに、貴女あなた、その時、フトお思おもいつきなされまして、いやとよ、一段の事とて、のう。

御妙としごころ 齡としなが見得もなし。世帯崩しに、はらはらとお急いそぎなされ、それ、御家の格子をすつと入いつて、その時じや——その時覚おぼえました、あれなる出窓ですまじや——

何と、その出窓の下に……令嬢おあねえさま、お机かたえなどござつて、傍の本箱、お手文庫の中など

より、お持出でと存じられます。寺、社に丹を塗り、番地に数の字を記いた、これが白金の地図でと、おおせで、老人の前でお手に取って展いて下され、尋ねます家を、あれか、これかと、いやこの目の疎いを思遣つて、御自分に御精魂な、須弥磐石のたえに申す、芥子粒ほどな黒い字を、爪紅の先にお拾い下され、その清らかな目にお読みなさつて……その……解りました時の嬉しさ。

御心の優しさ、御教えの尊さ、お智慧の見事さ、お姿の藤たい事。

二度目には雷神坂を、しゃ、雲に乗つて飛ぶように、車の上から、見晴しの景色を視めながら、口の裡に小唄謡うて、高砂で下りました、ははっ。」

と、踞むと、扇子を前半に帯にさして、両手を膝へ、土下座もしたそうに腰を折つて、「さて、その時の御深切、老人心魂に徹しまして、寝食ともに忘れませぬ。千万忝う存じまするぞ。」

「まあ。」

と娘は、またたきもしなかつた目を、まつげ深く衝と見伏せる。

この狂人は、突飛ばされず、打てもせず、あしらいかねた顔色で、家主は不承々々に中山高の庇を、堅いから、こつんこつんこつんと弾く。

「解りました、何、そのくらいな事を。いやさ、しかし、早い話が、お前さん、ああ、何とか云った、与五郎さんかね。その狂言師のお前さんが、内の娘に三光町の地図で道を教えてもらったところ云うのだ。」

「で、その道を教えて下さったに……就きまして、」

「まあさ、……いやさ、分ったよ。早い話が、その礼を言いに来たんだ、礼を。……何さ、それにも及ぶまいに、下谷御徒士町、遠方だ、御苦労です。早い話が、わざわざおいでなすつたんで、茶でも進ぜたい、進ぜたい、が、早い話が、家内に取込みがある、妻さいが煩うとる。」

「いや、まことに、それは……」

「まあさ、余りお饒しやべり舌しななさらんが可いい。ね、だによって、お構いも申されぬ。で、お引取なさい、これで失礼しよう。」

「あ、もし。さて、また。」

「何だ、また(さて。)さて、(また。)かい。」

与五郎は、早や懐手をぶりりと揺つて行こうとする、家主に、すが継るがごとく手を指して、「さて……や、これはまたお耳障り。いや就きまして……おあねえさま令嬢に折入つてお願いの儀が有りまして、幾重にも御遠慮は申しながら、辛抱に堪えかねてまかりで罷出しました。

次第と申すは、余の事、別儀でもござりませぬ。

老人、あの当時、……されば後月、九月の上旬。上野辺のある舞台において、初番に間狂言、那須の語。本役には釣狐のシテ、白蔵主を致しまする筈。……で、これは、当流においても許しもの、易からぬ重い芸でありましたの、われら同志においても、一代の間に指を折るほど相勤めませぬ。

近頃、お能の方は旭影、輝く勢。情なや残念なこの狂言は、役人も白日の星でござつて、やがて日も入り暗夜の始末。しかるに思召しの深い方がござつて、一舞台、われらのためにお世話なさつて、別しては老人にその釣狐仕れの御意じゃ。仕るは狐の化、なれども日頃の鬱懐を開いて、思うままに舞台に立ちます、熊が穴を出しました意気込、雲雀ではなけれども虹を取つて引く勢での……」

と口とは反対、悄れた顔して、娘の方に目を遣つて、

「貴女あなたに道を尋ねました、あの日も、実は、そのお肝入り下さるお邸へ、打合せ申したい事があつて罷出る処でござつたよ。

時に、後月あとつきのその舞台は、ちよつと清書にいたし、方々かたがたの御内見に入れますので、世間晴れての勤めは、更あらためて来霜月の初旬はしめ、さるその日本の舞台に立つ筈はずでござる。が、剣つるぎも玉も下磨きこそ大事、やがては一拭いかけますだけの事。先月の勤めに一方ならず苦勞いたし、外を歩ある行くも、から脛すねを踏ふんでとぼつきます……と申すが、早や三十年近う過ぎました、老人が四十代、ただ一度、芝の舞台で、この釣狐の一役を、その時は家元、先代の名人がアドの猫かりゆうと人をば附合うてくれられた。それより中絶をしていますに困こつて、手馴てなれねば覺おぼつか束つかない、……この与五郎が、さて覺束のうては、余はいずれも若しんい人、まだ小兒こどもでござる。

折からにつけ忘れませぬは、亡き師匠、かつは昔勤めました舞台の可なつかし懐なつかしさに、あの日、その邸の用も首尾すまいて、芝の公園に参つて、もみじ山のあたりを俳はい徊かいいたし、何とも涙に暮れました。帰りがけに、大門前の蕎麦屋そばやで一酌傾け、思いの外の酔よい心こころに、フト思出しましたは、老人一人にんの姪めいがござる。

これが海軍の軍人に縁付いて、近頃相州の逗子ずしに居おります。至いたつて心の優しい婦人で、

鮮あたらしい刺身を進じよう、海の月を見に来い、と音信おとづれのたびに云うてくれます。この時と、一段思付いて、遠くもござらぬ、新橋駅から乗りました。が、夏の夜は短ようて、最早や十時。この汽車は大船が乗換えでありましたの、もつとも兩三度は存じております。鎌倉、横須賀は、勤めにも参つた事です——

時に、乗込みましたのが、二等と云う縹はなだいろ色の濁つた天鵝絨仕立、ずっと奥深い長い部屋で、何とやら陰気での、人も沢山たんとは見えませいで、この方、乗りました砌みぎりには、早や新聞を顔に乗せて、長々と寝た人も見えました。

入口の片隅に、フト燈あかりの暗い影に、背屈せくぐまつた和尚がござる！ 鼠色の長頭巾、ト二尺ばかり頭ずを長う、肩にすんなりと垂たれを捌さばいて、墨染の法衣ころもの袖を胸で捲まいて、寂じやく寞まくとして踞うずくまつた姿を見ました……

何心もありませぬ。老人、その前を通つて、ずっとの片端、和尚どのと同じ側の向うの隅で、腰を落しつけて、何か、のかぬ中の老和尚、死なば後あと前さき、冥土めいどの路の松並木では、遠い処に、影も、顔も見合おうず、と振向いて見ますとの……」

娘は浅葱あさぎの清らかな襟を合す。

父爺おやじの家主は、棄てた楊枝ようじを惜しそうに、チョツと歯せせりをしながら、あとを探して、

時々唾吐く。

十一

「早や遠い彼方に、右の和尚どの、形朦朧として、灰をば束ねたように見えました処、汽車が、ぐらぐらと揺れ出すにつけて、吹散つた体になつて消えました、と申すが、怪しいでは決してござらぬ。居所が離れ陰気な部屋の深いせいで、また寂い汽車でござつたので。

さて、品川も大森も、海も畠も佳い月夜じや。ざんざと鳴るわの。蘆の葉のよい女郎、口吟む心持、一段のうちに、風はそよそよと吹く……老人、昼間息せいて、もつての外草臥れた処へ酔がとろりと出ました。寝るともなしに、うとうととしたと思えば、さて早や、ぐつぐつと寝込んだて。

大船、おおふなと申す……驚破や乗越す、京へ上るわ、と慌しゆう帯を直し、棚の包を引抱いて、洋傘取るが据眼、きよろついて戸を出ました。月は晃々と露もある、停車場のたたきを歩行くのが、人におくれて我一人……

ひとつ映りまする我が影を、や、これ狐にもなれ、と思う心に連立って、あの、屋根のある階子はしごを上る、中空なかぞらに架けた高い空橋からはしを渡り掛ける、とな、令嬢おあねえさま、さて、ここじゃ。

橋がかりを、四五間けんがほど前へ立って、コトコトと行くのが、以前の和尚。痩せに痩せた干瓢かんびょう、ひよろりとある、脊丈のまた高いのが、かの墨染の法衣ころもの裳もすそを長く、しよびしよびとうしろに曳ひいて、前かがみの、すぼけた肩、長頭巾もつそうを重ねに、まるで影法師のよう、ふわりふわりと見えます。」

と云うとふとそこへ、語るものが口から吐いた、鉄拐てつかいのごとき魍魎もうりょうが土塀に映った、……それは老人の影であった。

「や、これはそも、老人わしの魂たまの抜出した形かと思うたです、——誰も居ませぬ、中有ちゅううの橋はしでな。

しかる処、前途ゆくての段をば、ぼくぼくと靴穿くつばきで上あがつて来た駄夫だぶどのが一人あります。それが、この方なたへ向つて、その和尚と摺違すれちがうた時じやが、の。」

与五郎は呼吸いきを吐ついて、

「和尚が長い頭巾の頭ずを、木菟みみずくむくりと擡もたげると、片足を膝ひざ頭がしらへ巻いて上げ、一本の

脛すねをつつかえ棒に、黒い尻をはつと振ると、組違えに、トンと廻つて、両こぶしの拳を、はつたりと杖に支ついて、

(横須賀行はこちらかや。)

追掛おつかけに、また一遍、片足を膝頭へ巻いて上げ、一本の脛を突支つつかえぼう棒に、黒い尻をはつと揺ゆると、組違えにトンと廻つて、

(横須賀行はこちらかや。)

と、早や此方こなたさまに参つた駄夫どのに、くるりと肩ぐるみに振向いた。二度見ました。瘦和尚やせの黄色がかった青い長面ながづら。で、てらてらと仇光あだびかる……姿こそ枯れたれ、石も点頭なすくばかり、行澄おこなずいた和尚と見えて、童顔、鶴齡かくれいと世に申す、七十にも余つたに、七八歳と思う、軽いキヤキヤとした小児こどもの声。

で、またとぼとぼと杖に縋すがつて、向う下りさがりに、この姿が、階子段に隠れましたを、熟じつと視みると、老人思わず知らず、べたりと坐つた。

あれよあれよ、古狐が、坊主に化けた白蔵主はくぞうず。したり、あの凄すごさ。寂さびし。我は化けんと思えども、人はいかに見えるやらん。尻尾を案じた後姿、振返り、見返る処の、科趣こなおもむき。八幡はちまん、これに極きまつた、と鬼神が教おしえを給たまうた存念。且つはまた、老人が、工夫、辛勞しんろう、

日頃の思が、影となつて頭れた、これでこそと、なあ。」

与五郎、がつくりと胸を縮めて、

「ああ、業は誇るまいものでござる。」

舞台の当日、流儀の晴業、一世の面目、近頃衰えた当流にただ一人、（古沼の星）

と呼ばれて、白昼にも頭が光る、と人も言い、我も許した、この野雪与五郎。装束澄いて

床几を離れ、揚幕を切つて……出る！ 月の荒野に 渺々として化法師の狐ひとつ、

風を吹かして通ると思せ。いかなこと土間も棧敷も正面も、ワイワイがやがやと云う……

縁日同然。」

十二

「立つて歩行く、雑談は始まる、茶をくれい、と呼ぶもあれば、鰻飯を誂えたにこの弁当は違う、と喚く。下足の札をカチカチ敲く。中には、前番のお能のロンギを、野声を放つて習うもござる。」

が、おのれ見よ。与五郎、鬼神相伝の秘術を見しよう。と思うのが汽車の和尚じゃ。こ

の心を見物衆の重石おもしに置いて、呼吸いきを練り、氣を鍛え、やがて、件の白蔵主くだん。

那須野ヶ原の古樹の杭くいに腰を掛け、三国伝来の妖狐ようこを放つて、殺生石の毒あびを浴せ、当番のワキ獵師、大沼善八を折しやく伏ふくして、さて、ここどこそと、横須賀行の和尚の姿を、それ、髻ほうふつ髻ふつして、舞台に踊あらわす……しや、習ならよ、芸うよ、術じゆつよとて、胡麻ごまの油で揚げすまいた鼠ねの罫わなに狂いかかると、わつと云うのが可笑おかしさを囃はやすので、小兒こどもは一同、声を上げて哄どつと笑う。華族の後室が抱いてござつた狛ちんが吠ほえないばかりですわ。

何と、それ狂言は、おかしいものには作したれども、この釣狐に限つては、人に笑わるべきものでない。

凄すいう、寂さびしゆう、可恐おそろしげはさてないまでも、不氣味でなければなりません。何と！」
とせき込んで言つたと思うと、野雪老人は、がつくりと下駄を、腰こしに支ついて、路傍みちばたへ膝を立てた。

「さればこそ、先せん、師匠しせうをはじめ、前々に、故人がこの狂言をいたした時は、土間は野となり、一二の松は遠方おちかたの森となり、橋がかりは細流せせらぎとなり、見ぶつの男女は、草となり、木の葉ことなり、石となつて、舞台ただ充満いっぱいの古狐、もつとも奇特きせきは、鼠の油のそれよりも、狐のにおいが芬ぶんといたいた……ものでござつて、上手が占めた鼓つづみに劣せらず、声が、

タンタンと響きました。

何事ぞ、この未熟、蒙昧、愚癡、無知のから白癡、二十五座の狐を見ても、小児たちは笑いませぬに。なあ、——

最早、生効も無いと存じながら、死んだ女房の遺言でも止められぬ河豚を食べても死ねませぬは、更に一度、来月はじめの舞台が有つて、おのれ、この度こそ、と思う、未練ばかりの故でござる。

寝食も忘れまして……氣落ちいたし、心萎え、身体は疲れ衰えながら、執着の一念ばかりは呪詛の弓に毒の矢を番えましても、目が晦んで、的が見えず、芸道の暗となって、老人、今は弱果てました。

時に蒼空の澄渡つた、

と心激しくみひらけば、大なる瞳、屹と仰ぎ、

「秋の雲、靨黷と、あの鷄たちまち孔雀となつて、その翼に召したりとも思うお姿、さながら夢枕にお立ちあるように思出しましたは、貴女、令嬢様、貴女の事じゃ。」

お町は謹で袖を合せた。玉あたたかき顔の優しい眉の曇つたのは、その黒髪の影である。「老人、唯今の心地を申さば、炎天に頭を曝し、可恐い雲を一方の空に視て、果てしもな

い、この野原を、足を焦し、手を焼いて、徘徊い歩行くと同然でござる。時に道を教えて下された、ああ、尊さ、嬉さ、おん可懐さを存ずるにつけて……夜汽車の和尚の、室をぐるりと廻った姿も、同じ日の事なれば、令嬢の、袖口から、いや、その……あの、絵図面の中から、抜出しましたもののように思われてなりませぬ。

さように思えば、ここに、絵図面をお展下されて、貴女と二人立って見ましたは、およそ天ヶ下の芸道の、秘密の巻もの、奥許しの折紙を、お授け下されたおもい致す！

姫、神とも存ずる、令嬢。

分別の尽き、工夫に詰つて、情なくも教を頂く師には先立たれましたる老耄。他に縫うようがない。ただ、偏に、令嬢様と思詰めて、とぼとぼと夢見たように参りました。

が、但し、土地の、あの図に、何と秘密が有ろうとは存じませぬ。貴女の、お胸、お心に、お袖の裏に、何となく教が籠る、と心得まする。

何とぞ、貴女の、御身からいたいて、人に囁され、小児たちに笑われませぬ、白蔵王の法衣のこなし、古狐の尾の真実の化方を御教えに預りたい……」

「これ、これ、いやさ、これ。」

「しばらく！ さりとて、令嬢様、御年紀、またお髪の様子。」
娘は髪に手を当てたが、容つくとは見えず、袖口の微な紅、腕も端麗なものであつた。

「舞、手踊、振、所作のおたしなみは格別、当世西洋の学問をこそ遊ばせ、能楽の間の狂言のお心得あろうとはかつて存ぜぬ。」

あるいは、何かの因縁で、斯道なにかしの名人のこぼれ種、不思議に咲いた花ならば、われらのためには優曇華なれども、ちとそれは考え過ぎます。

それとも当時、新しいお学問の力をもつてお導き下さりようか。

さりとて瘦せたれども与五郎、科や、振は習いませぬぞよ。師は心にある。目にある、胸にある……

近々とお姿を見、影を去つて、跪いて工夫がしたい！ 折入つてお願いは、相叶うことならば、お台所の隅、お玄関の端になりとも、一七日、二七日、お差置きを願ひたい。」

「本気か、これ、おい。」と家主が怒鳴つた。
胸を打つて、

「血判でござる。成らずば、御門、溝石の上になりとも、老人、腰掛に弁当を持参いたす。平に、この儀お聞濟ききずみが願ねがひたい。

口惜くちおしや、われら、上根じょうこんならば、この、これなる烏瓜ひとつ一顆、ここに一目、令嬢おあねえさまを見ただけにて、秘事ひごとの悟さとも開けましように、無念むねんやな、老おいの眼まなこの涙なみだに曇くもるばかりにて、心の霧きりが晴はれませぬ。

や、令嬢おあねえさま、お聞濟ききずみ。この通りでござる。」

とて、開いた扇子せんすに手を支たいた。埃ほこりは颯せつと、名家なちばなの紋もんの橘たちばなの左右さゆうに散ちつた。

思おもわず、ハツと吐息といきして、羽織うゑの袖そでを、齊ひとしく清きよく土つちに敷しく、お町こがの小腕こが、むずと取とつて、引立ひだてて、

「馬鹿ばか、狂人きやうじんだ。此奴こいつあ。おい、そんな事ことを取上とげた日ひには、これ、この頃ころの画工えかきに頼たのまれたら、大切たいせつな娘むすめの衣服きものを脱ぬいで、いやさ、素裸すだか体かにして見みせねばならんわ。色情いろけ狂がいの、爺じいの癖くせに。」

「生蕎麦、もりかけ二銭とある……場末の町じやな。ははあ煮たて豌豆、古道具、古着の類。何じや、片仮名をもってキミヨウニナオル丸、疝氣寸白虫根切、となのつた、…

…むむむ疝氣寸白は厭わぬが、愚鈍を根切りの薬はないか。

ここに、牛豚開店と見ゆる。見世ものではない。こりや牛鋪じや。が、店を開くは、さてめでたいぞ。

ほう、按腹鍼療、蒲生鉄斎、蒲生鉄斎、はて達人ともある姓名じや。ああ、羨しい。

おお、琴曲教授。や、この町にいたい、村雨松風の調べ。さて奥床い事のう。

——べ、べ、べ、ベツかッこ。」

と、ちよろりと舌を出して横舐を、遣つたのは、魚勘の小僧で、赤八、と云うが青い顔色、岡持を振ら下げたなりで道草を食散らす。

三光町の裏小路、ごまごまとした中を、同じ場末の、麻布田島町へ続く、炭団を干した薪屋の露地で、下駄の齒入れがコツコツと行るのを見ながら、二三人共同栓に集つた、かみさん一人、これを聞いて、

「何だい、その言種は、活動写真のかい、おい。」

「違わあ。へッ、違いますでござんやすだ。こりやあ、雷神坂上の富士見の台の差配のお

嬢さんに惚れやあがつてね。」

「ああ、あの別嬪さんの。」

「そうよ、でね、其奴が、よぼよぼの爺でね。」

「おや、へい。」

「色情狂で、おまけに狐憑と来ていら。毎日のように、差配の家の前をうろついて附纏うんだ。昨日もね、門口の段に腰を掛けている処を、大な旦那が襟首を持って引摺出した。お嬢さんが継りついて留めてたがね。ヘッ被成もんだ、あの爺を庇う位なら、俺の頬辺ぐらい指で突いてくれるが可い、と其奴が癩に障ったからよ。自転車を下りて見ていたんだが、爺の背中へ、足蹴に砂を打っかけて遁げて来たんだ。」

それ、そりや昨日の事だがね。串戯じゃねえや。お嬢さんを張りに来るのに弁当を持ってやあがる、握飯の。」

「成程、変だ。」……歯入屋が言った。

「そうよ、其奴を、旦那が踏潰して怒つてると、そら、俺を追掛けやがる斑犬が、ぱくぱく食やがった、おかしかつたい、それが昨日さ。」

「分つたよ、昨日は。」

「その前めえもね、毎日だ。どこかで見掛ける。いつも雷神坂を下りて、この町内をとぼくさとぼくさ。その癖のん気よ。角の蕎麦屋から一軒々々、きよろりと見ちや、毎日おなじじうな独ひとりごと語を言わあ。」

「其奴が、（もりかけ二銭とある）だな、生意気だな、狂きちがい人の癖にしやあがつて、（場末）だなんて吐ぬかしやがつて。」と齒入屋が、おはむきの世辞を云つて、女房達をじろりと見る奴やつ。」

「それからキミヨウニナオル丸、牛豚開店までやりやがつて、按摩あんまン許とこが蒲生鉄齋、たつじんだ、土瓶だとよ、薬罐やかんめえ、笑わらかしやがら。何か悪いたずら戯ずをしてやろうと思つて、うしろへ附いちやあ歩あ行くから、大概口上を覚えたぜ。今もね、そこへ来たんぜ。」

「来るえ。」と、一所に云う。

「見ねえ、一番、尻尾を出させる考えを着けたから、駈かけぬ抜けて先へ来たんだ。——そら、そら、来たい、あの爺だ——ね。」

と、琴曲の看板を見て、例のごとく、帽子も被かぶらず、洋傘こうもりを支たいて、据腰すえごしに与五郎老人、うかうかと通りかかる。

「あれ！ 何をする。」

と云う間も無かつた。……おしめも禪も一所に掛けた、路地の物干棹を引はずと、途端の与五郎の裾を狙つて、青小僧、踏出す足と支く足の真中へスツと差した。はずみにかかつて、あわれ与五郎、でんぐりかえしを打つた時、

「や、」と倒れながら、激しい矢声を、掛けるが響くと、宙で撓めて、とんぼを切つて、ひらりと翻つた。古今の手練、透かさぬ早業、頭を倒に、地には着かぬ、が、無慚な老体、蹠跟となつて倒れる背を、側の向うの電信柱にはたとつける、と摺抜けに支えもあえず、ぼつたら焼の鍋を敷いた、駄菓子屋の小店の前なる、縁台にと落つ。

走り寄つたは婦ども。ばらばらと来たのは小児で。

鷺の森の稲荷の前から、と、見て、手に薬瓶の紫を提げた、美しい若い娘が、袖の縞を乱して駈寄る。

「怪我は。」

「吉祥院前の接骨医へ早く……」

「お怪我は？」

与五郎野雪老人は、品ある顔をけるりとして、

「やあ、小児たち、笑わぬか、笑え、あはは、と笑え。爺が釣狐の舞台もの、ここへ運べ

ば楽なものじゃ——我は化けたと思えども、人はいかに見るやらん。」

と半眼に、從容として口誦して、

「あれ、あの意気が大事じゃよ。」

と、頭を垂れて、ハツと云つて、俯向く背を、人目も恥じず、衝と抱いて、手巾も取りあえず、袖にはらはらと落涙したのは、世にも端麗なお町である。

「お手を取ります、お爺様、さ、私と一所に。」

十四

まるに桔梗の紋を染めた、殿めしい馬乗提灯が、暗夜にほのかに浮くと、これを捧げた手は、灯よりも白く、黒髪が艶々と映つて、ほんのりと明い顔は、お町である。と、眉に翳すようにして、雪の頸を、やや打傾けて優しく見込む。提灯の前にすすくと並んだのは、順に数の重なつた朱塗の鳥居で、優しい姿を迎えたれば、あたかも紅の色を染めた錦木の風情である。

一方は灰汁のような卵塔場、他は漆のごとき崖である。

富士見の台なる、茶枳だきにてん尼天の広前で、いまお町が立つた背後うしろに、

此この一廓かく、富士見稻荷鎮守の地につき、家々の畜犬堅く無用たるべきもの也なり。地主ちぬ。

と記した制札が見えよう。それからは家続きで、ちようどお町の、あの家の背後うしろに当る、
が、その間に寺院てらのその墓地がある。突切つつきれば近いが、避よけて来れば雷神坂の上まで、土
塀を一廻りして、藪やぶ 畳たたみの前を抜ける事になる。

お町は片手に、盆の上に白い切きれを掛けたのを、しなやかな羽織の袖に捧げていた。暗い
中に、向うに、もう一つぼうと白いのよだれかけは涎掛よだれかけで、その中から目の釣った、尖とがった真まつ
蒼おな顔の見えるのは、青石の御前立おんまえだち、この狐が昼も凄くい。

見込んで提灯が低くなつて、裾が鳥居を潜くぐると、一体、聖心女学院の生徒で、昼は袴はかまを
穿はく深い裾も——風情は萩の花で、鳥居もとに彼方あなた、此方こなた、露ながら明あかるく映つて、友染ゆうぜん
を捌さばくのが、内端うちわな中なまめに媚なまめかしい。

狐の顔が明あかり先さきにスツと来て近ちかづくと、その背後うしろへ、真まつ黒な格子が出て、下の石段に
踞うづくまつた法然ほうねんあたまは与五郎である。

老人は、石の壇に、用意の毛布けつとを引束ひつたばねて敷いて、寂寞ひっそりとして腰を据えつつ、両手を
膝に端坐した。

「お爺様。」

と云う、提灯の柄が賽銭箱さいせんばこについて、件の青狐くだんの像と、しなつた背中合せにお町は老人の右へ行く。

「やあ、」

もつての外元氣の可い声いを掛けたが、それまで目を瞑つぶつていたらしい、夢から覚めた面おもももち色いろで、

「またしてもお見舞……令嬢おあねえさま、早や、それでは痛いた入いる。——老人にお教へ下さると云うではなけれど、絵図面が事の起因わじりゆえ、土地に縁ゆかりがあるうと思えば、もしや、この明神に念願を掛けたらば——と貴女あなたがお心付け下された。暗夜やみよに燈火ともしび、大智識のお言葉じや。

何か、わざと仔細しさいらしく、夜中にこれへ出ませいでもの事なれども、朝、昼、晩、日のあるうちは、令嬢おあねえさまのお目に留とまつて、易やすからぬお心遣い、お見舞を受けます。かつは親御様の前、別して御尊父に忍んで遊ばす姫御前ひめごぜんの御身おんみに対し、別事あつてならぬと存じ、御遠慮を申すによつて、わざと夜陰を選んで参りますものを、何としてこの暗くらいに。これでは老人、身の置きどころを覚えませぬ。第一唯ただいま今も申す親御様に、」

「いえ、母は、よく初手からの事を存じております。煩っておりませんと、もつと以前にどうにもしたいのでございます。ほんとうにお爺様、貴老の御心労をお察し申して、母は蔭ながら泣いております。」

「ああ、勿体至極もござらん。その儀もかねてうけたまわり、老人心魂に徹しております。」

「私も一所に泣くんですわ。ほんとうに私の身体で出来ませう事でしたら、どうにもして上げ申したいんでございますよ。それこそね、あの、貴老が遊ばす、お狂言の罫にかかるために、私の身体を油でいためてでも差上げたいくらいに思うんですが……それはお察しなさいませよ。」

「言語道断」と与五郎は石段をずるりと上った。

十五

「そして、別にお触りはございませんの。おとしよりが、こんなに、まあ、御苦勞を遊ばして。」

「いや、老人、胸が、むず痒うて、ただ身体の震えまする外、ここに参つてからはまた格別一段の元気じゃ、身体は決してお案じ下さりよう事はない。かえつて何かの悟を得ようと心嬉しいばかりでござる。が、御母堂様は。」

「母はね、お爺様、寝ましたきり、食が細つて困るんです。」

「南無三寶。」

「今夜は、ちと更けましてから、それでも蕎麦かきをして食べてみよう、とそう言いましてね、ちようど父の在所から届きました新蕎麦の粉がありましたものですから、私が枕頭で拵えました。父は、あの一晚泊りにその在へ参つて留守なのです。母とまた、お爺様、貴老の事をそう申して……きつとお社においてなさるに違いない、内へお迎えをしたいんですけれど、ああ云つた父の手前、留守ではなおさら不可ません。」

「おとおお、いかにも。」

「蕎麦かきは暖ると申します。差上げたらば、と母と二人でそう申しましてね、あの、ここへ持つて参りました。おかわりを添えてございますわ。お可厭でなくば召上つて下さいましな。」

「や、蕎麦搔を……されば匂う。来世は雁に生りようとも、新蕎麦と河豚は老人、生命に

掛けて好きでござる。そればかりは決して御辞儀申さぬぞ。林間に酒こそ暖めませぬが、
 大宮人の風流。」

と露店でも開くがごとく、与五郎一廻りして毛布を拵げて、石段の前の敷石に、しゃんと坐る、と居直った声が曇った。

また魅せられたような、お町も、その端へ腰を下して、世帯ぶった手捌きで、白いを取つたは布巾である。

与五郎、盆を前に両手を支き、

「ああ、今夜唯今、与五郎芸人の身の冥加を覚えました。……ついては、新蕎麦の御祝儀に、爺が貴女に御伽を話す。……われら覚えましたが狂言の中に、鬼瓦と申すがあつての、至極初心なものなれども、これがなかなかの習事じゃ。——まず都へ上つて年を経て、やがて国許へ立帰る侍が、大路の棟の鬼瓦を視めて、故郷に残いて、月日を過ぎいた、女房の顔を思出で、絶て久しい可懐さに、あの鬼瓦がその顔に瓜二つじやと申しての、声を放つて泣くという——人は何とも思わねども、学問遊ばし利発な貴女じゃ、言わいでも分りましょう。絵なり、像なり、天女、美女、よしや傾城の肖顔にせい、美しい容色が肖たと云うて、涙を流すならば仔細ない。誰も泣きます。鬼瓦さながらでは、

ソツとも、嘘にも泣けませぬ。

泣け！ 泣かぬか！ 泣け、と云うて、先師匠が、老人を、月夜七晩、雨戸の外に夜あかしに立たせまして、その家の、棟の瓦を睨にらませて、動くことさえさせませなんだ。

十六夜の夜半でござった。師匠の御新造の思おぼしめし召とて、師匠の娘御が、ソツと忍んで、蕎麦、蕎麦かきを……」

と言が途絶え、膝に、しかと拳こぶしを当て、

「袖にかくして持つてござった。それを柿の樹の大な葉の桐のような影で食べました。鬼瓦ではなけれども、その時に涙を流いて、やがて、立って、月を見れば、棟を見れば、鬼瓦を見れば、ほろほろと泣けました。

さて、その娘が縁あつて、われら宿の妻に罷まかりな成る、老人三十二歳の時。——あれは一昨年果ととしてました。老の身の杖柱、やがては家の芸のただ一人の話対手あいて、舞台上で分別に及ばぬ時は、師の記念かたみとも存じ、心腹を語つたに——いまは惜おしからぬ生命いのちと思ひ、世に亡い女房が遺言で、止めやい、と申す河豚を食べても、まだ死ぬませぬは因果でござるよ。

この度の釣狐も、首尾よく化澄ばけすまし、師匠の外聞、女房の追善とも思おも詰いつめたに、式かたのごとき恥辱を取る。

さて、申すまじき事なれども、せんだつて計らずもおがみました、貴方あなたのお姿、お顔だちが、さてさて申すまじき事なれども、過去りました、あの、そのものに、いやいや貴女あなた、おあねえさま令嬢、貴女とは申すまい、親御でおわす母君が。いやいや……恐多おそれい申すまい。……この蕎麦搔かが、よう似ました。……

やあ、雁がんが鳴きます。」

「おお、……雁かりが鳴く。」

与五郎は、肩をせめて胸をわななかして、はらはらと落涙した。

「お爺様、さ、そして、懐炉かいろうをお入れなさいまし、懐中ふとこに私が暖めて参りました。母も胸へ着けましたよ。」

「ええ！」と思わず、皺手しわでをかけたは、真綿まわたのようなお町の手。

「親御様へお心遣い……あまつさえ外道げどうのような老人へ御氣扱おきあつかい、前ぜんお見上げ申したより、玉を削つて、お顔にやつれが見えます。のう……これは何をお泣きなさる。」

「胸がせまって、ただ胸がせまって——お爺様、貴老あなたがおいとしゆうてなりません。しっかりと抱いて上げたいわねえ。」と夜半よなかに荅つばむ、この一輪の赤い花、露を傷いたんで萎しおれたので

ある。

人は知るまい。世に不思議な、この二人の、毛布にひしと寄添ったを、あの青い石の狐が、顔をぐるりと向けて、鼻で覗いた……

「これは……」

老人は懐炉を取って頂く時、お町が襟を開くのには搦んで落ちた、折本らしいものを見た。「……町は基督教の学校へ行くんですが、お導き申したというお社だし、はじめがこの絵図から起ったのですから、これをしるしにお納め申して、同じに願掛けをしてお上げなさいと、あの母がそう申します。……私もその心で、今夜持つて参りましたよ。」

与五郎野雪、これを聞くと、拳を握って、舞の構えに、正しく屹と膝を立てて、

「むむ、いや、かさねがさね……たといクリシタンバテレンとは云え、お宗旨までは尋常事ではない。この事、その事。新蕎麦に月は射さぬが、暗は、ものじゃ、冥土の女房に逢う思。この燈火は貴女の導き。やあ、絵図面をお展き下され、老人思う所存が出来た！」

と熟と睜つた、目の冴は、勇士が剣を撓むるがごとく、袖を抱いてすつくと立つ、姿を絞って、じりじりと、絵図の面に——捻向く血相、暗い影が颯と射して、線を描いた紙の上を、フツと抜け出した足が宙へ。

「カーン。」と一喝。百にもあまる朱の鳥居を一飛びにスーツと抜ける、と影は燈に、空を飛んで、梢を伝う姿が消える、と訝か、非ずや、雷神坂の途半ばのあたりに、暗を裂く声、

「カーン。」と響いた。

「あれえ。」

「いや、怪しいものではありません。」

「老人の夥間ですよ。」

社の裏を連立って、眉目俊秀な青年二人、姿も対に、暗中から出たのであった。

「では、やつぱりお狂言の？……」

「いや、能楽の方です。——大師匠方に内弟子の私たち。」

「老人の、あの苦心に見倣え、と先生の命令で出向いています。」

と、斉しく深くした帽子を脱いで、お町に礼して、見た顔の、蠟燭の灯に二人の臉が露に濡れていた。

「若先生。」

「おお大沼さん。」

「貴方もかい。」

大沼善八は、靴を穿いた、裾からげで、正宗の四合壘を紐からげにして提げていた。
「対手が、あの意気込じやあ、安閑としていられません。寒い！（がたがたと震えて、）
いつでもお爺さんに河豚鍋のおつきあいであざわら
嘲笑われる腹癒せに、内証で、……おお、
寒！ ちびちびと敵を取ろうと思つたが、恐入つて飲めんのでした。——お嬢さん、貴女
は、氏神でおいでなさる。」

大正五（一九一六）年一月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成6」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年3月21日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第十六卷」岩波書店

1942（昭和17）年4月20日発行

入力：門田裕志

校正：高柳典子

2007年2月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

白金之絵図

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>